

野々市町新市名称検討委員会答申書

野々市町新市名称検討委員会

平成22年5月11日

野々市町長 栗 貴 章 様

野々市町新市名称検討委員会

委員長 徳 田 寿 秋

新市の名称について（答申）

平成22年1月29日付総第647号で諮問のありました市制施行に向けた新市の名称について、本委員会は3回の会議を開催し、本町の歴史や地名の由来などを検証するとともに、本町に係わるすべての人たちが、未来に夢と誇りを持つことのできる新市名称となるよう、公正かつ率直に意見交換のうえ、慎重に検討を重ねてまいりました。

その結果について、次のとおり意見を付して答申します。

答申内容

「野々市市^{ののいちし}」が適当である。

答申の理由

本町には、今から約3,500年前の縄文時代後期から晩期に営まれた大規模な集落遺跡である御経塚遺跡（国指定史跡）や、白鳳時代末の7世紀後半に建立され、巨大な礎石を今に残す末松廃寺（国指定史跡）があります。

これらのことは、古くから本町の町域が霊峰白山からの水源や地形などを背景とした、自然環境に恵まれた地域であったことを示すとともに、人々が生活しやすかったことを物語っています。

平安時代後期から南北朝時代初頭には、加賀国守護所が設けられ、富樫氏による統治が加賀一向一揆の支配となる15世紀末まで続き、加賀の政治と経済、文化の中心として栄えた地であったと言えます。

また、鎌倉時代後期には「市（いち）」が形成されていたという史料も残されています。

それは、1312年に記されたとされる白山本宮（白山比咩神社）に伝わる古文書に、水引神人^{みずひきじにん}と呼ばれる人たちが「野市（ののいち）」

に住んでいたという記述から証明されております。

これが「野々市」という地名の最古の文字史料であると思われます。

1486年、当時の山伏集団の中心的存在であったとされる京都「聖護院」の「道興^{どうきょう}」という人物が、矢作の集落に立ち寄った際に、次の句を詠んでいます。

「風おくる 一村雨に 虹きえて のゝ市人は たちもをやます」

虹がかかっていた空に、風が吹き、にわかには雨が降ってきたにもかかわらず、野々市の人たちは、忙しそうに仕事（立ち回り）を続け、止めようとしなない。

人々が集い「市（いち）」で活発な商業活動を行っていた当時の野々市の賑わいを知ることができ、「野々市」という地名が、古くからこの地にあった由緒ある地名であることがわかります。

これらのことから、

- ① 本町は、いくつかの市町村の合併により市制を施行するのではなく、単独で市制を施行することから、これまでの地名を継

承することが適当である。

② 「野々市」という地名は、中世以来この地の名称として認知されてきた歴史ある地名であり、その歴史を証明する大変貴重な文化であり、財産である。

③ 由緒ある地名を後世へ残していくことは、この地に住む者としての責務である。

との結論に達し、本委員会は、新市の名称を「野々市市」とすることが適当であると結論します。

野々市町新市名称検討委員会の開催状況（参考）

第1回

- ① 日 時 平成22年1月29日（金）午後2時から
- ② 場 所 野々市町役場2階 201会議室
- ③ 出席委員 6名
- ④ 審議内容
 - ・ 委員委嘱
 - ・ 委員長選出
 - ・ 諮問
 - ・ 新市名称検討方針（案）の審議

第2回

- ① 日 時 平成22年2月22日（月）午後2時から
- ② 場 所 野々市町役場2階 201会議室
- ③ 出席委員 6名
- ④ 審議内容
 - ・ 町名の由来について
 - ・ 新市名称候補について

第3回

① 日 時 平成22年5月11日(火) 午後2時から

② 場 所 野々市町役場2階 201会議室

③ 出席委員 6名

④ 審議内容

- ・住民意識調査結果報告
- ・新市名称案の審議と決定

答 申

① 日 時 平成22年5月11日(火) 午後2時30分から

② 場 所 野々市町役場 町長室

⑤ 出席委員 6名

野々市町新市名称検討委員会委員名簿

(五十音順：敬称省略)

職名	所属団体名・役職名	氏名
委員	野々市農業共同組合 組合長	金田 誠治
委員	石川県金沢城調査研究所 副所長	木越 隆三
委員長	野々市町教育委員	徳田 寿秋
委員	野々市町議会 議長	西田 治夫
委員	野々市町連合町内会 会長	藤 力
委員	野々市町商工会 会長	村山 和雄